

世界は大体エゴで周る

公野 湯瑠兎

「なあ昼からどうする？ すっげえ暇でさ、何か無い？ 今ならジューズ奢っちゃうよ。無論大好きな冷たい炭酸系をさ」

目の前にいる先程から暇だ、暇だと言っている俺の友人、苗字は浜野、名前は透、小学校からの付き合いの長い友人で、高校になっても二年連続クラスが一緒という所謂腐れ縁だ。

「知らん、学生なら帰って勉強でもしているよ。テストが終わったからって浮かれ過ぎじゃないか？」

俺は透の言葉を切り捨てた。

……でもまあかく言う俺も暇なんだけど。

先程俺も言った様に、今日あの忌々しい期末テストを終え皆がテスト後の短縮授業と来たるべき冬休みや年末の話題でクラスの連中は賑わっていた……そういえばテストが終わった途端透の奴は、俺にこう言った。

「なあー祐ちゃんよ、今日の竹田のツラ……滅茶苦茶乱れていなかった？」

その一言で先程までの緊張の糸が急に弾けて思わず吹き出し、他のクラスメイトが俺の方に振り向いた。無論話題の人、竹田も。

漫画とかに出てきそうな、五十近い壮年の容姿に黒縁の眼鏡がよく似合う、そして透の言うとおり彼はツラを被っている。

しかも大抵はちゃんと被れていない、まあ……今日は珍しく遅刻してきたのだ。あれくらいは荒れているはずだ。しかも自分が担当の歴史のテストの用紙も慌てて各クラスに配って周っていたのだ。その後にはクラスを周って生徒の問題に対する質問や、訂正箇所を言う時にはかなりヘトヘトで俺のクラスが最後の周る所だったので、終了時まで教卓横の椅子に腰掛けていた。

まあ……お疲れ様ですとしか俺は思えなくて、その時は彼の頭には目線は行かなかった。

すこし話がずれたが、俺は和泉 祐。唯の高校生で、容姿は普通だが良く顔は良いと言われたりはする。趣味とかは特になし、成績も並の上辺りをキープしている。進路は一応進学する予定。

……因みにどういう因果か、透の奴も進学希望で俺と同じ所を受けるらしい。そうそう俺は同じクラスのある女子に恋している。勿論片思いだが……いや、そんな事は今語ることでないな。

「おいおい、またボーっとしてよ。……さてはまた咲間さんの方を見ていたのかあ？」

咲間 葉月。背が少し低く高二にしては、ほんの少し幼い雰

困気が漂うクラスメイト。クリっとした目が特徴の顔立ちのおとなしい子で、護ってあげたいと思った男子は俺以外にも沢山いるだろう。彼女こそ俺が今現在進行形で恋している子だ。

透に言われて俺は彼女の方に目をやる。彼女は今テストの問題用紙と自分のノートと睨めっこしていた。見直しと確認のためだろう

「おい。……こりゃ重症だわ、恋っていうのは恐ろしいな」
横で透が呆れた顔で溜め息を吐いているが、そんな事はどうでも良い、そんな事より彼女に声をかけようか？ ……いや、邪魔するわけにはいかない。

だが、二学期になってやっと話せる頻度が増えたというのに流石に勿体無いのでは？ テスト明けというので会話の種はそれなりに出てくる。よし、なら話しかけよう。そうだな……出だしはやはり、今回のテストはどんな感じだった？ ……よしそれで行こう。俺は席から立ち上がり彼女の席の元に赴くそんな俺に小声で頑張れよと透は声援を送る。少し早足になっていた歩調を直し彼女の側に立つ。

「今回のテストはどんな感じだったっあー！」
……やってしまった緊張のあまりに噛んでしまった。後ろの方での透の微笑した顔が目には浮かぶ……。ああ恥ずかしいという表情は顔に出さない様になければ。

しかし周りに居た他の生徒達の顔は冷たかった。恐らく今の

やり取りを聞かれたのだろう。そうこの瞬間だけ活気で満ちたクラスは凍りついた。

そんな中彼女はやっと俺に気づき顔を上げた。

「あっ和泉君……ごめん何か言った？」

助かった……。どうやら彼女は見直しに集中していたためか先程の俺の言葉を聞いていなかったみたいだ。

「……ああそうそう今回のテストどんな感じだったと聞こうと思ってるね」

俺は少しまだ緊張していたのか彼女から目を逸らす様に話す。

……まあこんなやりとりを毎回行なっているのだが透からは少し落ち着いて喋れと毎回言われる。だが思春期の男子ならこんなのは仕方ないと思う、好きな異性の前では硬直し、まともに言葉を紡ぐことさえ出来ない。

……いい加減にもう少し進展したいところなのだが、

「和泉君はどうだったの？ そういえばさっきの時間の終わりの時どうしたの？ どこか具合が悪いかじゃないよね？」

先程、吹き出した事だろう。まあ、そうだろうほんの数秒とはいえクラスの皆に注目されたのだから彼女も知らないわけ無いだろう……。

「ああ……あれね、また透の奴がくだらない事を言ってきただけだよ」

とりあえず、あの馬鹿の仕業にしておく、というか事実だ。
「ああ、浜野君らしいね。……あっ、テストの事だったね。うん、結構出来たよ」

彼女の言う結構は……うん、言うまでもなく俺より良い点なのだろう。彼女は定期テストで毎回学年の上位にその名前が乗っている人物だ。進路も既に決定しているらしく先生方からも受験も難なく進むだろうと言われる程だ。

「俺は……うん、取り敢えず抑えていた範囲は出来たよ。まあ、空白もちょっと出来ただけ……」

反対に俺はと言うと、まあ大体平均点以上は取れているのであるが、やはりもつと成績を伸ばせと良く言われる。これでも頑張っているのではあるのだが……。

因みに意外にも透の奴は俺よりも成績は上の方だ。テスト前しか勉強しない男だが、昔から良い点を取っている。

「祐ちゃんよ、いつも空白は適当でも良いから埋めておけと言っているだろ？ 運が良けりゃ当たっている時とか、俺なんかいつもあるぜ」

俺の話聞きつけたのか、透が会話に入ってきた。こいつはテストをゲーム感覚で楽しんでる所がよくある。よく自分の点数を記録している。正直何の特があるのか俺は解らないのだが、

「それよりさ、咲間さんはこの後暇？」

すると突然透の奴はこんな事を言い出した。俺が彼女にかけたかったセリフをさりりと言い出したのだ。

「えっ、……突然どうしたの？」

当然ながら彼女は驚いている。俺だって今直ぐにこいつの口を塞ぎたい位に驚いている。が、そんな俺の考えを無視するよに透はまた喋りだす。

「ああっ！ 変な誤解しないでね。俺と祐ちゃんと三人でどこか遊びに行かないかって事だから」

それを聞いて少し安心した。実は俺も咲間さんの事が気になるのである……。なんて事を言われでもしたらこいつの事を張り倒してやるうかとも思った。

「いいよ。ちょうど私もこの後暇だなあって思っていたし。……」

……何処に行こうか？」

そしてその返事で俺の気分は有頂天まで登り詰めた。今思えば咲間さんと遊んだ事は無かったのだ。流石に彼女と二人きりでは無いが……

この際そんな贅沢も言っではいられない。そしてこの話を持ちかけてくれた透には感謝しきれない。十年近くのコイツとの付き合いで初めてコイツと友達で良かったと思った。

「取り敢えず何処に行こうか……」

と提案しようとした時、俺は明らかに俺たちに向かって近づいてくる一人のクラスメイトの女子生徒が目に入った。長い黒

髪をたなびかせながら歩いてくる彼女の表情は機嫌が良いのか笑みを浮かべている。だがしかし俺にとってはそうは思えない彼女——いやアイツの笑みは何事にも余裕を持った笑みである。彼女は咲間さんに声を掛けた

「葉月くテスト如何だった？ 無論あたしは完璧よ！」

ソイツは咲間さんに自信満々に語りかけた。ちなみにコイツの完璧は本当にその通りなのだが……

「私はまあまあかな？ でもアンちゃんには敵わないよ」

咲間さんがアンちゃんという人物……名は美佐戸 杏璃。咲間さんとは幼馴染で本人いわく親友らしい。

容姿端麗で文武両道。定期テストでは常に上位三人に食い込む実力者で人柄も良く、正に絵に描いた通りの完璧な人間。

……そう、黙っていればなんだが、

「和泉君……君はどうなのかしら？ 勿論私の点には及ばないと思うけど、今回こそは葉月に追いついているのかしら？」

俺の点数もこちらの顔色で大体解る癖にコイツは聞いてくる。勿論こんな戯言は無視しても良いのだが、生憎俺にはそれを出来ない。なぜなら……。

「まあまあ美佐戸さん、これでも裕ちゃんも頑張っているんだからさ、そんなキツイこと言わなくても良いじゃないの？」

透が口を挟んでくれて助かった。

……そういえばコイツにあの出来事はまだ話してなかった

な。

美佐戸 杏璃が何故、俺に食わない態度を取っているのか、事の発端は今から半年前に遡る……

— — —

六月の半ば——梅雨の所為でこの所はジメジメした氣候が続いていたが、今日は珍しく晴天だ。そして今日俺にとあるイベントが起きようとしていた。

「放課後屋上で待っています」

今朝俺の下駄箱にこのメッセージが記された置手紙が入っていたのだ。なんとも王道なシチュエーションで更に手紙にはハートマークのシルルさえ張っている。これは告白としか俺は思い浮かばなかった……が、一っだけ問題があるのだ。告白されるのは大変嬉しいことなのだが現在俺は一人の女子に片思いしているのだ。つまり俺はこの手紙をくれた子の思いは受け取れないのだ……。そういう申し訳なさを抱きながらも今屋上の方に足を進めている。校舎の三階の階段より更に上の階層をのぼり屋上へと通じる扉を開いた。

日が傾き少し茜色に染まりつつある空が目の前に広がり、安全のために設置されたフェンスが模様にも見える風景に人は居なかった。

「あれ……？」

俺は思わず独り言を呟いた。想像していた光景ではフェンスの付近で手紙の出し主が待っていたと思っていたのだが……。

俺は少し周りを見たが、個々には俺以外誰もいなかった。結局騙されたのかとため息をつき帰ろうと思ったとその時、

「随分と早いお帰りね……」

その声は俺が先ほど入って来た扉付近からだ。俺が振り返ると同時に扉は閉まり今まで死角となっていた所に彼女は居た。長い黒髪を後ろで結んだ所謂ポニーテールの髪型の同世代と思われる女子は両腕組み壁を背にして只々と此方を見ていた。俺はこの女子を知っていた。否、知らない訳がない彼女——美佐戸杏里が俺を呼び出したという事実にも俺は言葉が見つからなかった。同世代の男子達の一人でも、この光景を見つけてしまったら、まず俺は明日から学校に来にくくなるのは明らかなのだが……。いやそれより俺は彼女に一応聞かなければならない。

「えっと……美佐戸杏里さんだよな？」

「そうよ。……貴方と同じクラスで出席番号十五番の美佐戸よ。こうして貴方と二人きりで話すのは初めてね」

サバサバとした態度で彼女は話し出す。これは彼女が確か面識の無い生徒と話す時の特徴らしい、完璧な彼女もやはり人の子人見知りくらいはするらしい——と以前透が言っていたの

を覚えている。

ちなみに、普段友人達と話す彼女はとても明るくそのギャップの違いに心惹かれる男子も多いだとか……

「あのさ、君が如何いった用件で俺を呼んだかは解らないけど、君が聞きたい答えは期待できないと思うよ？」

たとえ彼女が本当に俺に告白するつもりで俺を呼び出した

のか解らないが、相手が咲間さん以外なら俺がいう結果は変わらない。それが彼女を傷つける言葉になっても……。

「申し訳ないのだけど、俺には好きな人が……」

「ええ知っているわ。咲間葉月の事が好きなのね」

……は？ どういうことだ。その事が知られている？ 透にしか話していないのに……。どこでその情報を掴んだらうか彼女は。

女は。

「その反応はどうやら本当みたいね。そう、残念だわ。……本当に」

彼女の言葉に妙な違和感を覚えたその刹那。彼女は勢いよく此方に駆け出し俺の首を右手で鷲掴み、空手か柔術の技の応用を使い俺をコンクリートの地面に叩き付けた。

「……！」

声にもならない痛みが体中に駆け巡り、同時に何故自分がこの様な事態に陥ったのか理解できなかった。

「葉月はね、アンタが思っている程強い子じゃないのよ。……」

「アンタなんかにあの子を渡すわけにはいかないのー!」

「一体何を訳のわからない事を言っているのだ? 突然人を叩き付けて拳句に恨みが籠った様な言葉を俺は吐かれたのが……。」

「おい……、くる……しい」

俺の言葉で我に返ったのか彼女は直ぐに手を放してくれた。

「……ごめんなさい。少しやりすぎたわ」

「はあ……はあ、何すんだよ!」

「まだ息苦しいのか単調に俺は怒鳴った。が、彼女は顔色一つ変えず此方に語りかけた。」

「担当直入に言うわ。彼女に……葉月に近づかないで。それが貴方の為にもなるわ」

「何だよコイツは……。頭が狂っているんじゃないのか? 男子のアイドルは実はとんでもない電波なサイコパスなのじゃないのかも思えてきた。俺は余りの出来事に遂に言葉も出なくなってしまうた。」

「まあいいわ……。暫く貴方の事見定めてみるわ。あの子にふさわしいのかどうか……。」

「そう言い残し彼女は屋上から去っていった。俺はただその場に座り込むことしか出来なかった。」

「とまあ……そんな恐ろしい出来事があった後もあれ以来あの状態の美佐戸とは会話していない。」

「実は当初、美佐戸は二重人格で俺に襲い掛かったのが裏の人格なのでは無いかとも思った事もあるが、結局は解らずじまい、真相は本人のみが知っている。無論俺は聞く度胸は持ち合わせて無いので……。」

「でさ! 葉月この後暇? 折角テスト終わったしどっか行かない?」

「悪いね、美佐戸さん。咲間さんはこの後俺と祐ちゃんと一緒に遊びに行くんでね……美佐戸さんも来る?」

「透の奴はあるうことかコイツも誘いやがった。絶対に嫌だ。コイツと一緒に遊ぶとか考えたら胃が痛みすぎて暫く飯が通らないかもしれない。」

「いやさ、あたしはこの後家で鍋でもするからさ、葉月も一緒に食べないかって思ったのだけど……。二人も来る?」

「鍋だろうが何だろうが、コイツが何かロクでも無いことを企んでいる感じがする。しかし、咲間さんとの交流を深める為にも此処は我慢するべきなのだろうか。」

「マジで! ちょうど温かい物でも食べたかったんだよね。」

俺達もご一緒して良いんですか？」

透がこんなにも良い反応をするのは恐らく鍋ではなく、美佐戸杏璃の家に行けるというのが主な原因であろう。何せあれでもこの学校のアイドル的な存在だ。俺のような裏の顔を知らない男子以外には願ってもない事なのだろう。

恐らくもう止めても、俺が断つてもこの流れは美佐戸の家で鍋会の流れになるのだろう。

「そうと決まれば早速買い出しに行こう！ 家の近くに安いスーパーあるから、そこに行こう！」

美佐戸が張り切って声を上げ、透も釣られてオーツと声を出した。俺にはそれがこれからの口でも無いイベント開始の合図にしか聞こえなかった……。

— — —

美佐戸の家は学校から歩いて二十分程の距離で、俺たちはまずはその近くにあるスーパーに向かうことにした。普段自転車で通学している俺と透は歩いて二人に合わせて自転車を押して歩いていた。無論荷物持ちは俺達の仕事である。ちなみにこの時初めて知ったが、美佐戸と咲間さんは小さい頃は隣町と同じマンションに住んでいたらしいのだが、中学卒業時に咲間さんの親御さんが一軒家を買って引越した。高校入学時に美佐

戸は現在のアパートで一人暮らしを始めたのだとか、聞いた話では美佐戸の親御さんは事業家でかなり忙しく、家には殆ど帰ってきてはいないみたいで一人暮らしも慣れているとか。

だからこそ幼馴染で幼少時頻繁に遊んだ咲間さんの事を溺愛しているが故に、あのような歪んだ裏の顔があるのでは無いか、と俺は思っている。

「アンちゃんの家に行くのは久しぶりだなあ。夏休み以来かな」

咲間さんは美佐戸と楽しげに話している。咲間さんは家から学校までは歩いて通っている。距離も美佐戸の家と方向は違うが同じくらいで不便ないらしい

「また冬休みも遊びに来なよ。葉月ならいつでも歓迎するよ」

美佐戸もまた機嫌よく話す。正直少し妬けるよ……いや、俺が咲間さんと会話する機会が少ないのだが、やはりもっと会話したいものである。

「あの二人は何時も仲がいいね。……それよりもあの美佐戸さんの家に行けるなんて夢みたいだな祐ちゃん！」

相変わらず脳天気な透は俺に話しかけてくる。そんなにも美佐戸の家に行けるのがこいつは嬉しいらしい。そんなこいつにアイツの裏の顔を教えても恐らく信じないのだろう……。

それから大体五分程歩いていると住宅が多く見かけるようになり目的地に近づいているのを感じた。

「着いたよ。ここで材料買うよ」

美佐戸の家の近くのスーパーに俺達は到着した。外見は普通のスーパーマーケットで今の時間帯が客の入り様を物語っているのか、あまり人は居なかった。

俺と透は駐輪所に自転車を駐め入り口で待っていた二人の元に行く。中に入り備え付けてある籠を一つ持って行き、取り敢えずは食品売場に向かう。前列には相変わらず咲間さんと美佐戸が仲良く話しながら歩いていて透がその中に入ろうとしている。俺は取り敢えず後ろの方を歩きながら商品を眺めていた。

それ故に俺は前から来る人影には気づかず、その人物とおもいきり正面衝突してしまった。ぶつかった衝撃に気がついたその時には遅く、相手の人は直ぐ傍で尻餅をついていた。

「すいません、怪我とか無いですか？」

俺は直ぐに立ち上がり、その人に謝罪しながら手を差し伸べた。その時に気がついたのだが、この人はどうやらこの店の従業員らしいチャック柄のエプロンを服の上から掛けており、頭には同じ柄の三角巾を被っている。髪を後ろで束ねているので恐らくは女性なのだが、眼鏡と口にマスクを付けているため顔が解りづらい

「あ……いえ、大丈夫です。此方こそすいません」

彼女は俺の手を借りずに立ち上がり、そのまま駆け足で別の

売り場に消えていった。

「おくい、祐ちゃん！ 置いていくぞ」

透の声に気がつくまで俺は彼女の去っていった方を見ていた。取り敢えず俺は皆の方に駆け足で進んでいった……。

— — —

スーパーで鍋の材料を揃えた俺達は、そのまま美佐戸の家に上がり込んで早速準備に掛かった。咲間さんと美佐戸は台所で野菜の下準備と薬味作り、俺達は美佐戸の支持でコタツを敷きその上にコンロや鍋を置き、台所組より早く仕事を終えていた透が美佐戸に手伝えることは無いかと尋ねたのだが、ゆっくりしていて良いよ。と最高の笑顔で返された様でかなり上機嫌でくつろいでいる。

「いやあくあんな良いスマイル貰っちゃあ、引き下がるしかないでしょ」

「そいつは良かったな。アイツの何処が良いんだか……」

いい機会だから帰り道にでもあの出来事のことを話そうか……。そんなことを思いつつ俺は床に座り込む。ふと自然に自分の視線が棚の上に意図的に倒されている写真立てに行く。家族との写真か？ にしても不自然だ。でもこれは良い機会だ。これを機に美佐戸の奴の弱みを握ってやろうではないか。そう

心に決め写真立てに手を伸ばそうとした時――

「二人ともく。こっちの準備が出来たからそろそろお鍋出してね」

咲間さんの声を聞き俺の手は止まった。取り合えずは先に準備だけでもしよう……。

「オツケく。そんじゃあコタツの上にも置きますか」

透がそう良いながら既に美佐戸が用意していたのだろうか、部屋の隅に置いてあるコンロの箱に手を伸ばし、箱からそれを取り出す。至って普通のカセット式のガスコンロでそれをコタツの上に置きボンベを取り付ける。後は土鍋の上に置き、湯を沸騰させれば大体の準備は完了のはずだ。

「お鍋そっちにもって行くよ」

そうこう思っているうちに鍋が運ばれてきた。既にお湯を入れていた様で後は野菜から入れるだけだ。とりあえず俺はコンロのスイッチを入れ火を点ける。数秒すると火が通ってきたのか、鍋のお湯が煮え始めてきた。

「野菜は切り終えたよ。悪いけど和泉君、この出汁の元入れておいてくれない？」

そう言うとき咲間さんが俺に手に納まる位の小さな瓶を渡してきた。恐らく美佐戸から渡されたのだろう。俺はそれを受け取りその蓋を開き鍋に中身を注ぎ込んだ。小麦色の粉末が湯に入りそれは鍋の中に広がっていった。次第に鰹出汁のいい香

りが部屋に広がってきた。

「それじゃあ野菜をぶち込みましょうか」

透の掛け声と共に台所から運び込まれた白菜、もやし、厚切りにした大根と人参、三つ葉とニラを女性陣は次々に入れていく、

「おい美佐戸、考えなしに入れているが……これ、何鍋なんだ？」

下茹でをするのは良いのだが少し多くないか？　そういう事も言いたかったのだが、美佐戸は凜とした顔で口を開いた

「そんなの決まっているじゃない。……閻鍋よ」

可笑しいな、俺の知っている閻鍋という奴は電気を消して暗い中食べる人達にわからぬ様に食材を入れていくのでは無かったかな？　俺が少々呆れている最中、透は愉快そうに他の具も入れていく

「なんか楽しいね、アンちゃん」

咲間さんは中々楽しそうに次々と食材が放り込まれる鍋を菜箸で整えながら、美佐戸に話しかける。

「そうね。そろそろお肉でも入れましょうか？」

美佐戸がそう言って先程買ってきた肉をレジ袋から取り出しパックを開けようとしたが。

「あっ！　しまった……アンちゃん皆の飲み物を買って来るのを忘れたから今から買い行こうよ」

突然咲間さんが思い出した様に美佐戸に言った。そういえば飲み物が無かったな……。

「ああ良いよ。俺が買ってくるけど……」

よっこらせと腰をあげて立ち上がるうとしたが、何故か咲間さんに止められてしまった。

「いいよ、私たちが行くよ。二人には行き道に荷物を持ってもらったし、私たちなんて喋ってばかりだったし……」

有難いのだが……、美佐戸は兎も角として、咲間さんに買いに行かせるのは何だか気が引けてしまう。しかし彼女は引き下がらないのだろうと俺は諦めた。

「……それじゃ頼もうかな。俺と透は適当な物で良いから」

一瞬透は何か言いたげな様子を見せたが、俺はそれを見なかった事にした。

「うん解ったわ。行こうアンちゃん」

咲間さんはそう言つて、美佐戸を引っ張って行くように連れて部屋から出て行った。

「……とりあえず、肉入れようか」

特に空気が沈黙することもせず、透がそのまま鍋に肉を入れ始める。その作業を見守る中、再び透が口を開いて

「なんで一緒に行かなかったんだよ。お前」

普段は俺のことを名前と呼ぶ透が、このように呼んでくる時は大概口論の前触れである。兎に角、今俺はこいつと口論なん

かはしたく無いので、落ち着かせるように俺も答える。

「あそこまで言われたら、黙って見送るしかないなって思つて」とすると透は大きくため息を吐き此方を睨む。

「折角のチャンス逃しやがって、……このチキン野郎。そっちが動けばこっちは幾らでもフォロ―出来るんだっていうのに……」

思えば今回咲間さんと話している中、遊びに行く切欠を作ったのは透だった。そう考えればこいつには感謝しきれないのだが、少々お節介にも感じてしまう。

しかし彼の期待も裏切ってしまったのは事実。やはりここは謝るのが筋という物なのだろう……。

「透……。済まないお前には何時も変な気を使ってもらっているのに肝心なところで失敗してさ」

少し恥ずかしい物だが今の心の中で思っていることを言ってみた。言われた透の方を見ると、口を馬鹿みたいに開けたまま此方を見ていた。

「ひどい顔だな。……今にも口から水流れ出てきそうだぞ、透」
余りにも透の反応が面白かったので率直に感想を言ってみた。

「いやあ……、以外にも素直に謝つたなあって驚いてしまったよ。俺どんな顔をしていた？」

「正に鳩が豆鉄砲でも食らった様な顔だぞ」

俺は透にそう言ってやった。すると怠けていた顔は緩み笑い出した。

「はっ、違いねえや」

気がつけば俺も釣られて笑っていた。と同時に俺は透と友達で良かったと改めて思った……が、お互い笑いあっていたが少し違和感を感じた。

無論このやり取りでは無くもっと別の物、先程まで漂っていた良い匂い、それが感じられず今度は少しずつ、明らかに異常な臭いが部屋に充満していつている。

もしかしてガスが漏れてしまったのか？ とコタツの上にある鍋に目を向けたが、コン口には以上が無かった。しかしもっと別の異様な光景を俺は見た。鍋の中身が明らかに違う異物の塊と化してグツグツと煮えていたのだ。全体的に毒々しい紫に変色していき具材の野菜は黄色や赤といった派手な色になり、肉は腐り異臭を放つ物体に変化していた。

「おい透！ こいつはやばいぞ、早く何とかしないと……」

透に声を掛けようとしたが、彼にその声は届いていなかった。何故なら俺が透の方を見た時は既に彼は倒れていたからだ。

「透!! おいっしっっかりし……」

俺は立ち上がり透を助け起こそうとしたが、途端に力が入らなくなり視界が眩んで俺はその場に倒れた。次に全身から警告音が鳴るような位の異常を感じ、それと同時に胃の中の物全て

が逆流しそうな吐き気が襲ってきた。けれど俺は這いずりながらも透の倒れている位置に向かおうとした。

が、そんな力すら沸かなかった。最後の悪あがきとして、俺は横にあった棚を思いっきり殴りつけてやった。無論隣の部屋の住人に気づいてもらうためだ。右手を振り子のように棚に打ち付ける。だが多少大きな揺れを立てるだけで、俺の行動は終わってしまった。が俺の目の前に何かが落ちてきた。

力を振り絞りそれを見ると例の写真立てだ。俺はまだ動く左腕でそれを立てた。そこに写っている桜の木の下で笑いあっている二人の人物の写真に俺は驚愕した。

一人は美佐戸だが、もう一人は知らない女子だ。いや俺は彼女を知っている。髪は今とはちがい長く伸ばしていて、眼鏡を掛けているがその顔は知っている——咲間さんだ。

そして日付が今年の春だ。だが、俺の記憶が確かなら去年も今年の春も……咲間さんは髪を伸ばしていなかったし、眼鏡も掛けていなかった。

「何だ……これ？」

そして俺は写真の端に油性ペンで書かれた文字に目を奪われるように見入った。

写真撮影 和泉祐

「どう言う事……だ」

俺の目の前は、そこを基準に暗くなっていき最後には何も見えず口の中に鉄の様な味を感じて意識が暗転した。

「ねえアンちゃん、どれにしようか？」

美佐戸杏璃のアパートを出て、すぐ近くのみぎり人気の無い通りに面する自動販売機に二人の少女はいた。

「そうね。和泉くんなら、お茶とか良いんじゃないかしら？」

一人は部屋で待っている友人の飲み物を選んでいる。もう一人——杏璃はその後ろで唯待っている。

「そうだね、暖かい緑茶とかいいかもね」

緩やかに彼女はそのままボタンを押す。

「そう。……これで確信が持てたわ」

対照的に杏璃は冷淡に言葉を紡ぐ、その直後に彼女は目の前にいる少女に対して敵対心ともとれる雰囲気を漂わす。

「えっ……どうしたの？ アンちゃん」

「黙りなさい。……単刀直入に聞いわ。貴女は誰？」

少女は突然の親友の発言に驚愕した。幼少時からお互い仲がよい杏璃が明らかかな殺気を纏っているのだからだ。

「だっ、誰って私は葉月よ？ 貴女の幼馴染で親友の……」

「違う!! 親友はもう一人いるはずよ! 祐を忘れたの!」

突如杏璃がまるで矛盾点を突くように言ってくる。確かに彼女の言う通り、和泉祐もまた親友の一人なのかもしれない

「あっ、そうだよね! 和泉君も大切な友達よね。……あはは、私調子悪いのかな？」

その言葉を聴き杏璃の表情は少し和らいだそして……、

「なら、貴女……どうしてその友達が好き飲み物も解らないのかしら? それに貴女と祐は親友というより恋人の様だったはずよ?」

杏璃は笑顔でそう言った。無論表面上だけだが。

「わっ……私は、……はははっ、さあ? あたしは誰でしょうか?」

すると少女は人が変わったような話し方をして来た。……そう

彼女は杏璃の知る咲間葉月では無かった。

「まさかこんなカウンターが仕掛けられていたなんて……。何時から気がついていたの?」

目の前の葉月の事を姉と呼ぶ少女は語りかけてきた。

「六月の初めよ。……違和感だらけで何も言葉が出なかったわ。それよりも説明して、貴女は何者なの?」

杏璃の質問にたいして少女は、やれやれと言って呆れた様子を見せた。

「落ちつきなよ? こうなったからには君をお姉ちゃんの代

打ちとして認めるしかないね」

淡々と清まして、どこか冷めた口調で彼女は語り始めた。

「さてと、……先ずは自己紹介だ。あたしは咲間三月。咲間葉月の死んだはずの双子の妹さ」

その言葉に杏璃は驚きを隠せなかった。親友は——葉月は一度もそんな事は言わなかったのだ。

「勘違いしないでね。お姉ちゃんもこのゲームを始めるまで知らなかったし、そもそも両親も隠していたみたいなのよ。あたしの悲劇を!! あたしという娘の存在をね」

「それで……貴女は死んでいるはずでしょう、何故今生きているのよ?」

「そうだ。彼女は今自分で死んだと言った、何故ここにいるのだ。その疑問を余所に三月は再び語る。

「簡単な話。……ずっとお姉ちゃんの心に住んでいました。それでね、余りにも私が執念深かったのか、お姉ちゃんが幸運なだけか……、神様はあたし達姉妹に不思議な能力をプレゼントしてくれたの。はいっ拍手! パチパチパチ……」

杏璃は思った。……この少女は相当壊れている。

「それで貰った力っていうのはね。まずお姉ちゃんは、……どんな事でも無かった事に出来るって能力を貰って。あたしはね、どんな事も自由に書き換えれるという素晴らしい力を貰いました。しかも! なんと初回サービス得点で、一回だけタダで

使えたのよ」

「タダ? ……まるで一回使う事に何か代償が必要ってみたいな言い方ね。」

杏璃の間に三月は、うーんと悩みながら答えた。

「違うんだよ。リスクを払うかどうかはあたし達には解らなかつたのよ……けどね、何回でも使える方法があるのよ……。因みに初回版の使用はあたしはあたしが死んだ事実を書き換えて見事復活!! お姉ちゃんは何とも親孝行な娘なこと、両親が密かに背負っていた借金を無かった事に」

杏璃は先程言われた単語を頭で整理して繋いでみた。そう、その方法とは——

「正解——!! 頭の良い君なら察しがついたはずだよ。そう、あたしとお姉ちゃんはゲームを行った。ルールは簡単、毎年この時期に死亡してしまう和泉祐君を救えたならお姉ちゃんの勝ち。逆に直接手を下さず殺したらあたしの勝ち。見事勝利した方はもれなく能力を3回も使えます! 3回ですよ。そんなのどちらかが1回勝つだけで使い方によっては……片方を消す事が出来るのにね」

杏璃の頭には最悪の考えが過ぎった。まさか葉月は既に……。「大丈夫。あたしこれでもお姉ちゃんっ子だし、まだ消してないよ」

まだと言う事は、……いつかは消すつもりなのだろう。この

子の性格ならやり兼ねない。

「察しの通りあたしは一度ゲームに勝利しております。そうそう、いい忘れたけど勝利者にはもう一度ゲームを続けるのかを決める権利を貰えるよ！」

「つまり……この世界は2度目のゲーム中ってことね？」

「そう、そしてあたしが書き換えたのは、一つ、あたしの存在をお姉ちゃんと書き替える事。これであたしは普段は咲間葉月。二つ、勝手ながらキャストを増やした」

「どう言う事よ」

杏璃の質問に三月は口元を押さえ笑いながら答えた。

「ぷぷぷ……、解んないの？ 浜野透君。彼の事だよ。本来なら恋人が出来なかった君の為に作った人間よ」

（馬鹿らしい……。滅茶苦茶な力をよく其処まで無駄に使えるなんて）

杏璃はそう思いなが視線を三月に戻した。

「それじゃあ、最後はコレが君に関係していると思うけど、三つあまりにもお姉ちゃんが弱かったので、お姉ちゃんが勝利に近づく様な事態が起こる様に世界を書き換えました」

それで選ばれたのが、葉月の親友である美佐戸杏璃が選ばれたのだ。しかも世界が書き換えられる前の世界の記憶等を引き継いでだ。

「二つ程質問して良いかしら、この流れだと祐は死んだはずよ

ね？」

「はい！ 私が調合した特性の毒薬で死んだはずですよ。」

三月は元氣良く返事した。これまた憎らしい笑顔で

「じゃあもう一つ、今回のゲームはそうしたら貴女の勝ちなのかしら？」

「いや、それがね。今回は君の途中参戦と、お姉ちゃんが消息不明って事でドローって判定みたい」

つまり今回は無かった事になると言う事だ。……そして三月は笑顔見せた。

「つまり、スタートまで巻き戻しだ〜!!」

その掛け声と共に空から亀裂音がし始めた。杏璃は見上げると空高くに大きな穴が出来ていたのに気がつく、次第に亀裂音だけではなく荒々しい風の音もし始めた。

「世界が……再構成されるって事!？」

「その通り！ ではまた会おう！」

そう言うと、三月はその場から走り去り穴に向かって跳躍した。その光景で杏璃の視界が歪んだ。

— — —

美佐戸杏璃が目を覚ますと、そこは見慣れた教室だった。

(さっきのは……夢?)

辺りを見渡すとクラスメイトが談笑している姿が多く、中にはグループで机をくっつけて、一緒に弁当を広げている者もいた。その光景から察するに昼休みなのだろう。

ふと、杏璃は近くの窓の外を見た其処には桜の木があった。「あの木は……」

それを見た瞬間頭に強烈な頭痛が走った。それと同時に脳内に色々な光景がフラッシュバックする。親友とも呼べる二人との思い出や、先程の夢の光景が……。

頭を抑える杏璃に気がついた一人の男子生徒が声をかける。

「美佐戸さん、大丈夫？ 俺と一緒に保健室行く？」

「おい透、保険委員に任せるのが普通だろ。お前は座っている」聞き覚えのある二人の声に気がつき、顔上げると其処にいたのは、夢に出てきた作られた生徒。浜野透ともう一人の親友、和泉祐だ。

「……祐、随分と冷たいのね」

その一言に祐は目を見開いて驚き、透はそれ以上に驚愕した。「祐ちゃん!! 何時の間に美佐戸さんとそんな親しくなっているのだよ。アンタ！ 俺見損なっただぞ」

「おい、美佐戸なんか寝ぼけているのか？ 俺とは今日同じクラスになったばかりだろう？」

その一言に杏璃は目が覚めて、急に立ち上がり二人を押しのかももう一人の親友の席に向かった……。

其処には眼鏡を掛けた長い髪の少女が座っていた。杏璃は少女の席の前に立ち、また座席の少女も杏璃を見上げ微笑んだ。

「おはようアンちゃん。いい夢でも見られた？」

彼女は杏璃が思っていた通りの少女だった。

「ええ、……お陰様で最悪の目覚めよ」

それを聞いて少女は今度は控えめに笑った。

「へえ……そりゃよかったよ。所で髪伸ばしたんだ。コレは伊達眼鏡だけと似合う？」

「一瞬でも本物と思った自分が恥ずかしいわ。さっさと外しなさい」

少しむっと頬膨らませ、怒ったように見せる少女の仕草も所詮は此方を惑わす物なのだろうと彼女は思った。が、直ぐに少女は真っ直ぐと此方を見て口を開いた。

「それじゃ、……改めて始めましょうか。創造と破壊を賭けたゲームを……」

少女——咲間三月、今回のゲームマスターで前回の勝者それに相対するは、挑戦者で前回の敗者咲間葉月の代理人——美佐戸杏璃……。

三月は掛けていた眼鏡を外し、床に落とす。それが床に落ち辺りに音を翻した時、両者は呟いた。

「ゲームスタート」

完

あとがき

どうも初めましてのお方は初めまして、また君かね……と
思われたその貴方!! お久しぶりです。最近ペンネームの
改名を考えております。公野^{はらの} 湯瑠瑠^{ゆると}でございます。

今回はこの冊子をお手に取って頂きありがとうございます。
以前作品を掲載した御厨際から早や五ヶ月近く……いやあそ
の間にも様々なイベントが御座いました。まずはクリスマス皆
さんはご家族やご友人、大切な人といかに過ごされましたか?
因みに私は同輩の銀シャリ夫君同様アルバイトの勤め先で楽
しく……? 働きました!! そして年末大晦日大掃除やら帰
省やら忙しい日々でいたでしょう……そんな中私は。

やはりアルバイトでした!! いやあもう大変でしたよ。夕
方は余りお客さんは来ないのですが、暗くなるにつれて酔っ払
った方々沢山いらっしやいました。いやあ今年は味わいたくな
い物です……。

次に直ぐ来るお正月。初詣に御節にお年玉。家族で出かける
機会が多いと思います。……まあ大体察しの良い方はこの時点
でお気づきでしょうが、あえて言います。私のお正月は……
殆どをバイト先で過ごしました(勘弁して欲しいです……)
全くもってすごいですよ。十二月二十四日から日曜日だけを

抜いて翌年の一月四日までずっとバイトです。もうこりゃあ一
生の思い出になりますよ……。

さてと、話題を変えまして今回の作品に付いて補足や制作の
裏話等を書いて行きたいと思えます。まず先に一言……和泉祐
が主人公と思わせたが、アレはブラフだ……。初期構成から彼
はこの物語の主役ではありませんでした。最初は本物の咲間^{さくま}
葉月^{はづき}。彼女が終盤に三月^{みつき}の前に現れて真相が明らかになつてく
る……。

しかし書いている途中に少し疑問に感じ、更には唯でさえ矛
盾が多いのにこれ以上増やすというのもどうかと思いました。
そこで考えた結果、葉月は敢えて表舞台には登場せず

(実際は登場してはいるのですが……)

葉月の友人美佐戸杏璃^{みさとあんり}がその役割に当てはめられました。彼
女が世界の違和感気がついたのは今回の出来事の約半年前:
彼女はある日突然この世界の違和感に気が付きます。そして
和泉君が回想で語った様な事を起こしますそれで彼女は確証
を得ます。

まあ和泉君曰くの通り彼女の葉月への執着心は相当重たい
のですが……。

かくして本編の通りの事態になりました。しかしまあ土壇場

で考えたものでありまして中々にお粗末な感じになっております。

因みにこの話を続ける気は今のところ御座いません。もしかしたらまた何かの機会に書ければいいと思います。

ではまた何処かでお会い出来れば……。

それではまた然らば!!

文芸研究会一回生

公野 湯瑠兔